

研究者からのメッセージ





立命館大学 男女共同参画推進リサーチライフサポート室

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1 TEL. 077-561-2631 FAX. 077-561-2633 E-mail: rsupport@st.ritsumei.ac.jp URL: http://www.ritsumei.ac.jp/research/rsupport/

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。 それまでわからなかったことを解き明かす感動、 そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って 輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。



<u>Case #01</u> 生命科学と社会をつなぐ 学問と出会い、研究者の道へ

松原 洋子 先端総合学術研究科 教授

P.04



ライフサイクルとともに 熟成していく研究を味わう 海老 久美子 スポーツ健康科学部 教授

P.06



Case #03 文化人類学から学ぶ 「正しい」進路、「常識」の考え方 鈴木 桂子 衣笠総合研究機構 教授

P.08



Case #04 娘とパートナーが私の中に 「余白」を作ってくれた 中村 正

P.10



Case #05 人間の動作を理解する 機械を目指し生体を計測する 塩澤 成弘 スポーツ健康科学部 教授

P.12 活動紹介 コラム ニ宮 周平 法学部 教授

男女共同参画推進リサーチライフサポート室 室長代理

研究との出会いは 高校の「生物」の授業

私が高校生だった1970年代の中頃は、生 命科学の技術と、倫理や社会、人類との関係が 世界的に議論され始めた、まさに「生命倫理の 出発点」ともいうべき時期でした。また高校の 生物の教科書に分子生物学の知見が入ってき たのも、この頃です。論理が明快な分子生物学 を知って、それまで「生物=暗記科目」としか 思っていなかった私は新鮮な衝撃を受けまし た。また当時の高校の生物の先生が、授業中に 生命科学と社会に関する本を紹介してくれた ことが、今の研究にもつながっています。

大学では生物学を専攻しましたが、生物や 実験よりも、もつばら興味があったのは、思想 史や制度史的な方法論の方でした。「科学と 社会の関係を歴史的に追う」という内容の本 を読んで「科学史」という学問分野があること を知ったのは、そんな時です。「私がやりたい のは、まさにこれだしとのめり込みました。生 物学では実験や観察に基づく研究で卒業論 文を書くのが普通ですが、「科学史」をテーマ に研究したかった私は、それを認めてくださの大学院生が集まる中で学部生は私一人で る指導教官を探しあて、まずは博物学史に関 する卒業研究をまとめました。

その後、大学院で科学史の他、優生学や、優 生学と密接に関連するジェンダー論を研究。 現在も生命科学と社会をつなぐ融合的な領 域の研究を続けています。

科学史の研究会で やりたいことを実感

高校で生物の授業を受けた時から「将来は 生命科学と社会の間をつなぐような仕事をし たい」と考えてはいましたが、「研究者になる う」と思い定めたのは、大学3回生の頃です。 当時、学生結婚をしたのですが、そのお祝い のなかに、科学史の本が何冊かありました。そ して科学史が、私が関心を持っていた「文系と 理系、倫理や社会と科学の両方にまたがる領 域 | を研究できる分野であることを知りまし た。それで本の著者に手紙を書き、科学史の 研究会を紹介してもらいました。今思えば、こ れが大きな転機でした。研究者や研究者志望

したが、研究者の方々の報告を聞いたり、修士 や博士の院生たちと交流し、「自分のやりたい ことがここにある」と実感。それが研究者の道 に足を踏み入れるきつかけになりました。

以来、科学史、生命倫理学、科学技術社会論 を専門として研究してきました。とりわけ関心 があるのは、近現代の生物学や生命科学、医 学の技術が発達するのに伴って起こる、生殖 や病気、障がいをめぐる問題です。中でも、 2005年に最終報告書をまとめた「ハンセン 病問題に関する検証会議 | に参加したことは、 研究者として大きな糧になっています。弁護 十や当事者団体、ソーシャルワーカーの全国 組織が関わる実態調査の事務局長として、さ まざまな立場の方々と協働しながら被害実態 調査のマネジメントに携わりました。調査で は、療養所で暮らした経験を持つ元患者の 方々へのインタビューも実施。淡々とした語り 口から伝わってくる「人生の荒波の中で揉ま れて洗われて、今ここにいる」ことの凄みや人 の存在の奥行きを肌身で感じられたことも、 非常に貴重な経験となりました。

Case #01

生命科学と社会をつなぐ 学問と出会い、研究者の道へ

松原洋子 先端総合学術研究科 教授



自分だけの キャリアを築いてほしい

研究者を志す皆さんに助言するとしたら、 まず時流に迎合しないこと。どんな状況でも 自分が研究したいことを大切にしてください。 研究者に年齢は関係ありません。一生に一つ でもインパクトがある研究成果を出せたら、 すばらしいと思います。もう一つは、人と比べ ないこと。特に女性の場合は、若手研究者と しての基礎をつくる時期と、結婚・出産・子育 てといったライフイベントが重なることが多 いので、焦りに駆られることもあると思いま す。そんな時は「60歳の時にどうなっていた いのか」を想像してください。それぞれが抱え る事情や歩むキャリアは異なります。だから、 自分で自分をプロデュースし、自分だけの キャリアを築いていくことが重要です。また失 敗や偶然がもたらすチャンスもあります。ぜ ひそれも生かしてください。



1987年、東京大学大学院理学系研究科を修了後、1998年、お茶 の水女子大学大学院で博士課程を修了。同年、同大学大学院人間 文化研究科助手に就任する。その後、三菱化学生命科学研究所の 特別研究員を経て、2002年、立命館大学産業社会学部教授に就 任。2003年より現職。さらに2012年から先端総合学術研究科 研究科長、2015年から立命館大学人間科学研究所所長を歴任。

家電メーカーから キャリアをスタート

「管理栄養十の資格を取れるから」と料理 好きの父親に勧められ、女子大学の付属校か ら家政学部入学した時は、後に研究者になる とは夢にも思っていませんでした。けれど今 振り返れば、スポーツ栄養学をはじめ多岐に わたる分野の先生から指導を受けたことが、 研究者、教員としての素地になっていると感 じます。

大学を卒業後、最初に就職したのは大手家 電メーカーでした。私に課せられたのは、自 社製品であるオーブン電子レンジのための レシピ開発や調理のデモンストレーション。 この時、人前で料理をしながら、言いたいこと を伝えるという経験しました。転機が訪れた のは、3年後。世の中はフィットネスブームの 到来で、続々とスポーツクラブが増えていま した。それを目の当たりにし、ダイエットやス

ポーツに役立つ食事指導についての企画書 を作成し、知り合いのスポーツクラブに飛び 込みで持ち込んだ事がきつかけでスポーツ関 連企業の栄養サポート部門に採用され、以後 さまざまなスポーツのアスリートや企業の健 康作りのための栄養サポートに携わったこと がその後の人生を変えることになりました。

中でも中心となったのが、高校野球選手と そのチームへの栄養サポートです。成長期に あるスポーツ選手にとって「食」がいかに大 切か、最初は理解してもらえないことも多 かったですが、公立進学校を中心に、少しず つサポートするチームが増え、この「『食』に対 して自立する大切さしをより多くの球児に伝 えたいとの想いをまとめた『野球食』を出版 したのもこの頃でした。

働きながら 大学院へ進学

「本にまとめたなら、その効果を検証しなく ていいの?」。今も恩師と仰ぐ甲子園大学の 栄養学の先生にそう問われたことが、研究の 道へと舵を切るきつかけです。効果検証のた めの調査を行う目的で、会社に勤めながら大 学院に入学。40歳を目前に控えた年でした。

博士前期課程に進学し、半年間をかけて高 校球児300名を対象に食事指導の効果を検 証したところ、確かな効果が認められた一方 で、思いもよらない結果も見えてきました。調 査して初めて、これまでは要望をきちんと伝 えられる生徒の意見しか汲み取れておらず、 それ以外の声なき声を拾えていなかったこ とに気づかされたのです。

さらに前期課程を終え会社の仕事に戻ろう と思った矢先、全国の高校球児の食事や体組 成などを調べるという大規模な調査の依頼を 受けたためそのまま博士後期課程へ進学。そ

の後、国立スポーツ科学センターに転職し、研 究と平行しながら高校球児をはじめさまざま なジュニアアスリートやオリンピック強化選 手の栄養サポートを続けてきました。

まずは自分自身を 大切にすること

スポーツ健康科学部の新設と同時に立命 館大学に招かれたのは8年前。地域のスポー ツと食についての研究のおもしろさを実感し たのは、ここへ来てからです。今の課題は、ス ポーツの食卓に「地域のおいしさ」を取り入 れること。特にキャンパスのある滋賀県に注 目しています。地域の食材で健康・スポーツを テーマにした食品やメニューを開発等、地域 の健康・スポーツを食から持続可能なものと して地域に定着させる手だてを考えています。想います。

現在、日本の若い女性の多くは「痩せ」の願 望からエネルギー、栄養不足になりやすく、 そのことは、日本の将来の健康を阻害する可

能性にもつながることが心配されています。 そうした社会の未来に対する提案をする事も 「知 | を発信する研究者の役割の一つだと考え ています。だからこそ栄養の分野で研究者を 志す若い女性には、自身の健康管理を考え、 体の中から生まれる輝きや美しさに目を向け てほしい。専門分野を好きになることと同時 に自分自身の健康を大切にすることも研究者 に欠かせない素養だと思います。研究者にな る道は、直線とは限りません。自分のライフサ イクルやキャリアに合わせて関心や研究テー マも変わっていく。年齢や経験を重ねるとと

もに研究が 熟成するの をじつくり と味わうの も楽しいと



Case #02

サイクルとともに 熟成していく研究を味わう

海老 久美子 スポーツ健康科学部 教授

1985年、大妻女子大学を卒業後、(株)日立家電(当 時) に入社し、家電製品の調理指導を担当。1989年 (株)スポーツプログラムスに転職し、アスリートの 栄養サポートに携わる。2002年甲子園大学大学院 博士前期課程に入学。2006年、国立スポーツ科学 センタースポーツ医学研究部でオリンピック強化選 手の栄養サポートに従事。2007年、甲子園大学博 士後期課程を修了し、2010年より現職。

文化人類学から学ぶ 「正しい」進路、 「常識」の考え方

と変な(?)自信を得て日本に帰ってきました。

4回牛で1年間、アメリカのイリノイ州立大 学に留学。日本で学芸員の資格取得課程を履 修していた私は、週末にシカゴの博物館を訪 れるのが楽しみの一つでした。当時まだ日本 にはなかった、体験したり、触れたりできるユ ニークな展示を見て、「楽しみながら学べる 博物館がある」と知り、博物館への興味が膨

者の先生方と出会い、初めて「研究者」、「大学 教員 という選択肢を自分のこととして身近 に感じました。

博物館学を修めるべく アメリカへ

「どうせなら博物館学を学べる大学院へ

ラムを履修しました。その間、ブルックリン 美術館でインターンシップを経験。浮世絵の コレクションの企画展示のプロジェクトを 任され、それが修十論文のテーマにもなりま した。修士課程修了後は、ペンシルバニア大 学考古学人類学博物館で給付金付きのイン ターンとして、アジア部門のコレクション管 理に携わりました。さらにウィスコンシン大

自分に合う場所を 見つけてほしい

博十号を取得後、帰国。2008年に立命館 大学に招かれて以来、京都で暮らしています。 ニューヨークで浮世絵に触れて以来、浮世絵 研究を続ける他、京都に来てからは、型紙や 友禅染などの「きもの」文化にも研究を広げ ています。特に関心を持っているのは、伝統的 な日本文化である浮世絵や「きもの」が海外 にどのように伝わり、異文化理解にどのよう な影響を与えたか。グローバルな視点で研究 するのも、海外で学んだ影響だと思います。

振り返ってみますと、社会の常識に疑問を 持ちつつ、好きなことを追求してきた結果、や りがいのある研究や職場に出会えたのだと 思います。人生の様々な局面で出会った人々 に影響を受け、道が開けたことは幸運でした。 皆さんが進路を考える際にも、「こうあらね ばならない | と決めつけないでくださいとお 願いしたいですね。人類学は常識を疑うこと から始まる学問です。ある社会で正しいとさ れていることが、別の社会では不正とみなさ れることも少なくありません。だからこそ、他 ではない自分自身に合う道や場所を見つけ てほしい。それが研究者であれば、すばらし いと思います。

南山大学を卒業後、4年間、大学職員として勤めた 後、アメリカへ。ニューヨーク大学大学院人文科学研 究科で人類学の修士号を取得と同時に博物館学プ ログラムを修了。2006年、ウィスコンシン大学マ ディソン校で人類学の博士課程を修了。帰国後、非 常勤講師を経て、2008年、立命館大学衣笠総合研 究機構の研究支援者に。2012年、立命館大学アー ト・リサーチセンターの副センター長に就任。2012 年より現職。

研究日和 Vol.03 | 07

鈴木 桂子

衣笠総合研究機構 教授

文化人類学を学び、 海外を体験した学生時代

幼い頃から外国に興味があった私の夢は、 世界中を旅行すること。小学生の時、叔父の家 の本棚で文化人類学者・中根千枝先生の著作 を見つけ、「世界各地でフィールドワークをする 学問があるんだ | と知ったことが、文化人類学 に関心を持った最初でした。しかし当時の私 にとって研究者になることはもちろん、女性が 社会で働き続けることすら当たり前ではあり ませんでした。人類学科のある地元の大学を 志望した時、「女子なのに短大に行かないの か」と進路指導の先生に驚かれたほどです。

「外国に行って、いろんなことを知りたい」と いう思いが叶ったのは、3回生の夏休み。イン ドネシア文化を研究する先生がインドネシア でのフィールドワークをお膳立てしてくださっ たのです。初めて海を渡り、数人の学生とバリ

島の山奥にあるテンガナンという村で2週間 を過ごしました。水道はなく、食事もあまり衛 生的とは思えなかったけれど、地域の祭りを 見学したり、現地の暮らしに触れたりするの は楽しかったですね。中には馴染めない学生 もいましたが、「私はどこでも生活できそう」 らみました。

文化人類学を学び、海外も体験しましたが、 当時は大学院へ進学することまでは考えてい ませんでした。研究の道に目が開かれたのは、 卒業後に4年間、地元の女子短大に職員とし て勤務した時です。ここで多くの女性の研究

進学しよう1。職を辞して改めて大学院へ進 学することを決めた時、そう思ったのは留学 での経験があったからです。当時の日本では 博物館学を学べる大学院を見つけられず、 再びアメリカへ。ニューヨーク大学の人類学 部の修士課程で学びながら博物館学プログ

学マディソン校の博士課程に進学。アメリカ のキュレーターの多くは、研究者としても活 躍しています。研究とキュレーターの仕事の 両方に深く関わった経験が、研究者としても 生きています。



06 | 研究日和 Vol.03



ジェンダーの平等に 男性がどう貢献できるか

私は、立命館大学法学部卒業後、大学院社会 学研究科で社会病理学を専攻しました。1980 年代、社会科学の中にジェンダーの視点が入っ てきた頃です。

ジェンダーといえば、女性側が差別や暴力の 被害を受けている現状からどう権利回復してい くかという見方が主流だったのですが、私は男 性としてジェンダーの平等にどう貢献できるか を考え、「男性の暴力」というテーマに行きつき ました。性犯罪、DV、深刻なストーカー、これら

法学部から社会学研究科に進み、産業社会学 部の教員になり、今は人間科学研究科で臨床心 理学や司法に関わる対人援助学のようなこと も扱っている私は、学問分野ではなく、社会課 題を中心に研究課題を作ってきました。解決す べきこと、必要とされていることがあるなら、学 問領域は後から自分で作っていく。そんな姿勢 でやってきたつもりです。

子育では、家庭の外で するのがいい

研究テーマとして「男性の暴力」に行きついた

と思います。祖父母の力を借りすぎることもお すすめしません。家族や親族で閉じるのではな く、もっと広いネットワークの中で育てた方が いい。妻が3、夫が3、家庭外が4くらいがちょ うどいいのではないでしょうか。「今日は帰り が遅くなるから面倒見ておいてよ」「じゃあ今 日はうちで」と、他の保護者に頼みました。子ど もは集団の中で育つもの。食事も、よその家で ならきちんと「いただきます」と言ってきれいに 食べられます。子ども自身にとっても、他者の視 線がある環境が必要だと思います。

「女性の社会進出」に対して「男性の家庭進出」 という言葉はありません。しかし、これはとても



には、何かを削るという意識はありません。教育、 研究、行政、そのいずれでもない「余白」のような もの、それが大きくなることによって、三つのこと それぞれも豊かになると思うのです。仕事に対 するプライベートということではなく、「余白」を

娘とパートナーが私の中に 「余白」を作ってくれた

の多くは男性の暴力です。もちろん男性と男性 の暴力も問題です。自殺やひきこもりも男性が 多いのですが、これは暴力が自分に向けられた 結果です。世の中を平和にするには、男性性に 焦点を当てた社会病理の研究が必要ではない かと考えたのです。

以来、出所者の社会復帰支援、少年刑務所で の性犯罪者の再犯防止支援、対人暴力のある人 への脱暴力支援など、さまざまな現場に関わる ことによって個人への臨床的アプローチを実践 すると同時に、法律によってきちんと犯罪化す るため、DV防止法やストーキング規制法などの 法整備や先の刑法改正に際して提案すること等 を通して、社会へのアプローチも続けています。

背景には、暴力はパートナーシップ、つまり関係 性を破壊するものだと考えたことも影響してい ます。当時私は同居しているパートナーと、夫婦 別姓の民法改正運動を行っていました。日本の 民法は人の生き方にニュートラルではないと感 じ、互いに尊重し合うパートナーシップの実践 として、事実婚による夫婦別姓を選択したのです。

在外研究したUCバークレイで単親子連れ赴 任の父子生活もしました。子育てにも深く関わり ましたが、一番大変だったのは三つ編みです。研 究者であるパートナーが外国に行っていた時、 娘に頼まれ、美容院にも習いに行ったのですが 無理でした。ゼッケンを縫うのも苦手でしたね。

育児を夫婦で半分ずつ分け合うのは良くない

大事なことだと私は思います。これまでジェン ダーの不平等があったため、家庭が女性の城に なってしまっていることや、母として完璧を目指 したいという母性が、男性の家庭進出を阻んでい る面があると思います。洗濯物のたたみ方や皿を しまう場所など、細かいことは気にせず、もつと男 性の家庭進出を進めてほしいと思います。

他者の視線で作られた 内的な豊かさが「余白」

私は教学部長や教学担当常務理事として行政 にも深く関わるようになり、現実問題として教育 や研究にとれる時間は少なくなりました。でも私

含めた全体として、自分があるという感覚です。 「余白」がないと、単に時間が増えた、減ったとい うことに振り回されてしまうように感じています。

私の「余白」を大きくしてくれたのは、娘の想 像力の豊かさと、パートナーの感受性です。自分 にはない他者の視線によって作られた内的な 豊かさは、三つの領域のどれにも当たらない、 プライベートでもない、私のすべてに影響を与 える大切な「余白」なのです。

男性教員には、育児休暇や介護休暇を取るこ とをすすめています。ケアの領域に深く関わるこ とによって、異性や異年齢からの視点を持つこ とが大切だからです。それは、人間力にもつなが るものだと思います。

中村正

産業社会学部 教授

立命館大学法学部卒業後、1986年大学院社 会学研究科博士課程修了。1988年より立命 館大学産業社会学部、総合心理学部、人間科 学研究科、応用人間科学研究科で研究と教育 に携わる。専門分野は社会病理学、臨床社会 学、社会臨床学、男性性研究。『「男らしさ」か らの自由』『家族のゆくえ』『ドメスティック・ バイオレンスと家族の病理』など著書・共著 書·訳書多数。

研究日和 Vol.03

Case #05

人間の動作を 理解する 機械を目指し 生体を 計測する

塩澤 成弘

スポーツ健康科学部 教授

2002年、立命館大学大学院理工学研究科情報シス テム学専攻博士課程前期課程修了、2005年、同大 学部を経て、2009年、立命館大学経営学部准教授 2010年、同大学に新設されたスポーツ健康科学部 准教授に就任。2018年より現職。

ロボットから人間に関心が 移り生体計測の研究へ

「ロボットを作りたい」という夢を抱いて立 命館大学理工学部ロボティクス学科に入学 しました。4回生まではロボットの研究室に所 属していた私が現在の専門分野である生体 計測に興味を持ったのは、牧川方昭先生との 出会いがきつかけです。

卒業研究に取り組んでいた時、同じ建物内 にあった牧川先生の研究室で、先生が作られ た機械を目にしたことで、その後の進路が大 きく変わりました。その機械は、人が乗って操 作するような、いかにも「メカ」といったかた ちをしながら、人間の動作に協調して動くも のでした。機械を正確に動かすことも難しい けれど、人間の動作を機械に理解させ、その 通りに動かすのはさらに困難な課題です。そ れまでロボットや機械を作ることに焦点を当 て、人間と機械との関係性を意識したことの なかった私には驚きで、「あんなものを作る 研究をしたい」と一瞬にして引き込まれまし た。人間の動作をいかに計測するか。それを 考えるうちに、いつしか関心はロボットから 人間そのものに移り、研究テーマも生体計測 へと変わってきました。何より牧川先生のも とで学びたくて、博士課程前期課程に進学す る時、生体計測の研究室を志望しました。

恩師のようになりたい その思いで博士課程に進学

大学院に進学したものの、当初から 「研究 者になる」と決めていたわけではありません でした。博士課程前期課程の2年間はあっと

いう間です。1年目が終わる頃には 就職活動を始めなければならず、 「研究し足りない!!という思いが募 りました。しかし当時の理工学部で は、博士課程前期課程に進学する 学生は多いものの、博士課程後期 課程にまで進む人は稀で、将来どう なるのか想像もつきません。私も一 時は企業に就職して研究開発に携 わろうかと迷いました。

研究者の道を選んだ一番の決め 手は、「牧川先生のようになりたい」

と思ったことです。牧川先生は、どんなに難し い課題にぶつかっても、誰も思いつかないよ うなアイデアを次々に生み出し、驚くような スピードで解決していきます。エネルギッシュ で行動力にあふれ、企業や他大学の研究者が 参画するさまざまなプロジェクトでもリー ダーシップを発揮し、統括されていました。私 が今、専門分野を超えてさまざまな人や組織 と連携するような大規模な研究に積極的に 取り組むのも、そんな牧川先生の姿を間近に 見たからです。加えて、決められた研究しか許 されない企業と違い、大学でなら自分自身が 重要だと思うテーマを追究できると思ったこ とも、進学を選んだ理由の一つでした。

主体的に取り組んだ経験が 研究者としての糧になる

博士課程後期課程を修了後、他大学で講師 として勤めた2年間を除き、今日までずっと 立命館大学で研究を続けてきました。現在は、 同じ大学に勤める研究者である妻とともに 小学生の子どもを育てながら大学に通って



います。子育てを通して多様な視点から人間 を見られるようになったことは、人間の生体 や健康について研究する上でも大いに役 立っています。人間が成長していく様子を観 察することはもちろん、1日5時間、赤ん坊を 抱いていたら人間の身体はどうなるのか、ま た子どもがそばにいる時にはどのように動 かなければならないのかなど、実際に経験し たことで深く理解できるようになったことが たくさんあります。

これから研究者を目指す若い方々にも、 「自ら進んでさまざまな経験を積んでくださ い」と伝えたいですね。私自身、研究する上で もまた仕事をマネジメントする上でも、「周囲 を見て学ぶこと|を大切にしてきました。一見 無意味に思えるようなことでも、主体的に経 験すればそれが後に活きることがあります。 そう考え、どんなことでも自分自身にとっての 「価値」を探し、目的意識を持つて取り組んで ほしいと思います。加えてリーダーシップやコ ミュニケーションスキルも磨き、異分野の人と さまざまなプロジェクトを進められる力を 持った研究者が育ってくれればうれしいです。

活動紹介

立命館大学男女共同参画推進に伴う取組成果

立命館大学は、2016年度文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (特色型)」に採択され、2018年度で中間年度となる事業3年目を迎えます。この3年間での事業成果をご報告致します。

1. 女性教員在職比率の向上

事業最終年度(2021年)目標である女性教員比率23%を達成するため、ポジティブ・アクションとして女性限定公募や、定年退職教員補充の前倒し女性限定人事など、本学独自の施策も交えつつ推進を図っています。



2. 学内保育所開園

教職員や学生が学修・教育・研究・就業の場において、最大限 に力を発揮するための基盤的要素として整備を進めてきまし た学内保育所が、衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスに 2018年9月に開園致しました。

この取組は、2017年1月に実施されました「ワークライフ・

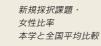


バランス及び男女共同参画に関するアンケート」より学内保育 所へのニーズの高まりを受け、本格的に始動しました。その後、 院生・全教職員への保育ニーズに関するアンケート、ワーク ショップ開催、講演会、視察などを行い各部課の協力のもと、短 期間での保育所開設を実現致しました。



3. 科学研究費助成事業-科研費-女性研究者採択率

2017年度の本学における、女性研究者による新規課題の申請件数は過去最高(134件)となり、全申請件数のうち女性比率は最も高い水準でした(19.6%)。また採択件数(45件)、採択における女性比率(23.8%)ともに最も高い水準となり、採択における女性比率は前年度に続いて、全国平均(20.9%)を上回る結果となりました。



── 立命館大学── 全国平均



<u>コラム</u>

ダイバーシティ 研究環境実現 イニシアティブ事業(特色型) 中間年度を迎えて

二宮 周平 法学部 教授 男女共同参画推说

法字部 教授 男女共同参画推進 リサーチライフサポート室 室長代理 2016年度、本学はこの事業に採択されました。 事業の重要な目標は女性教員比率の向上です。 事業終了年度(2022年3月末)までに、女性教 員比率(無期+有期)を現在の18.4%から23% に、とりわけ自然科学系では10%から15%にす ることを目標としています。期限の定めのない無 期教員に限ると、20%、自然科学系10%が目標 です。

人文・社会科学系学部の多くは目標を達成しています。2018年5月時点で無期教員比率の高い順に並べてみます。食マネジメント学部40.0%、総合心理学部30.0%、国際関係学部27.1%、法

学部 25.0%、政策科学部 25.0%、産業社会学部 24.4%、文学部 23.0%、経済学部 22.0%、経営 学部 19.6%などです。

他方、自然科学系学部では、2016年度末時点では、情報理工学部8.3%、薬学部8.3%、生命科学部5.7%、理工学部2.7%でした。そこで積極的改善措置として、常任理事会は、無期の女性教員限定公募や定年退職者2年前倒しによる女性枠を設けることを決めました。吉田総長、故渡辺副総長、田中副学長の各学部教授会への働きかけもあり、上記4学部でこれらの取組の合意が得られ、4学部で実施し、計6名が採用されました。

その結果、薬学部 15.4%、生命科学部 13.2% と目標の 10% を超える学部も出てきました。

人間の1/2は女性です。女子学生比率が1/2を超える学部もあります。しかし、上記のような無期の女性教員比率です。それほど女性の能力は男性に劣るのでしょうか。むしろ、女性は理科系に向かない、大学院進学する必要はない、子育てが大切など保護者や教員、さらには社会の女性に対する固定観念、それを前提とする諸制度の影響が多いように思います。この固定観念をなくすことがダイバーシティ(多様性)の原点です。

現時点での目標達成学部もさらに上を目指し

て積極的に女性採用を進めてほしいです。そのためにも、研究者の母体を広げる必要があります。 研究のおもしろさ、しんどいけれど達成感や楽しさがあることを、多くの女性に発信することが重要です。「研究日和」はその1つです。大学院に進学した女性を育て、安心して研究者として応募できるように、性別を問わず研究、教育に邁進できる環境を作ることが、本学の課題だと思います。

